

殿さまの茶わん

小川未明

青空文庫

昔、ある国に有名な陶器師がありました。代々陶器を焼いて、その家の品といえ、遠い他国にまで名が響いていたのであります。代々の主人は、山から出る土を吟味いたしました。また、いい絵かきを雇いました。また、たくさんの職人を雇いました。

花びんや、茶わんや、さらや、いろいろのものを造りました。旅人は、その国に入りますと、いずれも、この陶器店をたずねぬほどのものはなかつたのです。そして、さつそく、その店にまいりました。

「ああ、なんというりっぱなさらだろう。また、茶わんだろう…

…。」といつて、それを見て感嘆いたしました。

「これを土産に買っていこう。」と、旅人は、いずれも、花びんか、さらか、茶わんを買ってゆくのでありました。そして、この店の陶器は、船に乘せられて他国へもゆきました。

ある日のことでございます。身分の高いお役人が、店頭にお見えになりました。お役人は主人を呼び出されて、陶器を子細に見られました、

「なるほど、上手に焼いてあるとみえて、いずれも軽く、しかも手際よく薄手にできている。これならば、こちらに命令をしてもさしつかえあるまい。じつは、殿さまのご使用あそばされる茶わんを、念に念を入れて造ってもらいたい。それがために向

いたのだ。」と、お役人は申されました。

陶器店の主人は、正直な男でありまして、恐れ入りました。

「できるだけ念に念を入れて造ります。まことにこの上の名譽はございませぬしだいです。」といつて、お礼を申しあげました。

役人は立ち歸りました。その後で、主人は店のもの全部を集めて、事のしだいを告げ、

「殿さまのお茶わんを造るように命ぜられるなんて、こんな名譽のことはない。おまえがたも精いっぱい、これまでにない上等な品物を造つてくれなければならぬ。軽い、薄手のがいとお役人さまも申されたが、陶器はそれがほんとうなんだ。」

と、主人しゅじんは、いろいろのことを注意ちゅういしました。

それから幾いくにち日かかかつて、殿とのさまのお茶ちやわんができあがりしました。また、いつかのお役やくにん人が、店頭てんとうへきました。

「殿とのさまの茶ちやわんは、まだできないか。」と、役やくにん人はいいました。

「今日きょうにも、持もつて上あがろうと思おもつていたのでございます。たびたびお出でかけを願ねがつて、まことに恐きょう縮しゆくの至いたりにぞんじます。」と、主人しゅじんはいいました。

「さだめし、軽かるく、薄手うすでにできたであろう。」と、役やくにん人はいいました。

「これでございます。」と、主人しゅじんは、役やくにん人にお目めにかけまし

た。

それは、軽い、薄手の上等な茶わんであります。茶わんの地は真っ白で、すきとおるようでございました。そして、それに殿さまの御紋がついていました。

「なるほど、これは上等の品だ。なかなかいい音がする。」
 といつて、お役人は、茶わんを掌の上に乗せて、つめではじいて見ていました。

「もう、これより軽い、薄手にはできないのでございます。」と、主人は、うやうやしく頭を下げて役人に申しました。

役人は、うなずいて、さつそく、その茶わんを御殿へ持参するように申しつけて帰られました。

主人は、羽織・はかまを着けて、茶わんをりっぱな箱の中に収めて、それをかかえて参上いたしました。

世間には、この町の有名な陶器店が、今度、殿さまのお茶わんを、念に念を入れて造つたという評判が起こつたのであります。

お役人は、殿さまの前に、茶わんをささげて、持つてまいりました。

「これは、この国での有名な陶器師が、念に念を入れて造つた殿さまのお茶わんでございます。できるだけ軽く、薄手に造りました。お気に召すか、いかがでございませうか。」と申しあげました。殿さまは、茶わんを取りあげてごらんになると、なるほど軽い、

薄手うすでの茶わんちやでございました。ちようど持つてゐるかいがないか、
 気きのつかないほどでございました。

「茶わんちやの善悪ぜんあくは、なんできめるのだ。」と、殿さまとのは申され
 ました。

「すべて陶器とうきは、軽いかる、薄手うすでのを貴びます。茶わんちやの重いおも、厚手あつで
 のは、まことに品ひんのないものでございます。」と、役人やくにんはお答こた
 えしました。

殿さまとのは、黙だまつてうなずかれました。そして、その日ひから、殿との
 さまの食膳しょくぜんには、その茶わんちやが供そなえられたのであります。

殿さまとのは、忍耐にんたい強いお方かたでありましたから、苦くるしいこともけ
 っして、口くちに出だして申もうされませんでした。そして、一國こくをつかさ

どつていられる方かたでありましたから、すこしぐらいのことには驚おどろきはなされませんでした。

今度こんど、新あたしく、薄手うすの茶わんが上あがってからというものは、三度どのお食しょくじ事に殿さまは、いつも手てを焼やくような熱あつさを、顔かおにも出だされずに我慢がまんをなされました。

「いい陶器とうきというものは、こんな苦くるしみを耐たえなければ、愛玩あいがんができないものか。」と、殿とのさまは疑うたがわれたこともありません。また、あるときは、

「いやそうでない。家来けらいどもが、毎まい日にち、俺おれに苦痛くつうを忘わすれてはならないという、忠義ちゆうぎの心こころから熱あつさを耐こらえさせるのであろう。」
と思おもわれたこともあります

「いや、そうでない。みんなが俺を強いものだと思っているので、こんなことは問題としないのだろう。」と思われたこともありました。

けれど、殿さまは、毎日お食事のときに茶わんをごらんになると、なんと、なんということなく、顔色が曇るのでごさいました。

あるとき、殿さまは山国を旅行なされました。その地方には、殿さまのお宿をするいい宿屋もありませんでしたから、百姓家にお泊まりなされました。

百姓は、お世辞のないかわりに、まことにしんせつでありました。殿さまはどんなにそれを心からお喜びなされたかしれません。いくらさしあげたいと思っても、山国の不便なところでありま

したから、さしあげるものもありませんでしたけれど、殿さまは、百姓の真心をうれしく思われ、そして、みんなの食べるものを喜んでお食べになりました。

季節は、もう秋の末で寒うございましたから、熱いお汁が身体をあたためて、たいへんうもうございましたが、茶わんは厚いから、けつして手が焼けるようなことがありませんでした。

殿さまは、このとき、ご自分の生活をなんとという煩わしいことかと思われました。いくら軽くたつて、また薄手であつたとて、茶わんにたいした変りのあるはずがない。それを軽い薄手が上等なものとしてあり、それを使わなければならぬということ、なんとというるさいばかげたことかと思われました。

殿さまは、百姓のお膳に乗せてある茶わんを取りあげて、つくづくごらんになっていました。

「この茶わんは、なんとというものが造つたのだ。」と申されました。

百姓は、まことに恐れ入りました。じつに粗末な茶わんでありましたから、殿さまに対してご無礼をしたと、頭を下げたおわびを申しあげました。

「まことに粗末な茶わんをおつけもうしまして、申しわけはありません。いつであつたか、町へ出ましたときに、安物を買つてまいりましたのでございます。このたび不意に殿さまにおいでを願つて、この上のない光栄にぞんじましたが、町まで出て茶わ

んを求めてきます暇がなかつたのでございます。」と、正直な百姓はいいました。

「なにをいうのだ、俺は、おまえたちのしんせつにしてくれるのを、このうえなくうれしく思っている。いまだかつて、こんな喜ばしく思つたことはない。毎日、俺は茶わんに苦しんでいた。そして、こんな調法ない茶わんを使つたことはない。それで、だれがこの茶わんを造つたかおまえが知つていたなら、ききたいと思つたのだ。」と、殿さまはいわれました。

「だれが造りましたかぞんじません。そんな品は、名もない職人が焼いたのでございます。もとより殿さまなどに、自分の焼いた茶わんがご使用されるなどということは、夢にも思わなかつ

たでございましょう。」と、百姓しやうおそは恐れ入いつて申しあげました。

「それは、そうであろうが、なかなか感かん心しんな人間にんげんだ。ほどよいほどに、茶ちやわんを造つくっている。茶ちやわんには、熱あつい茶ちやや、汁しるを入いれるということそのものは心こころ得えている。だから、使つかうものが、こうして熱あつい茶ちやや、汁しるを安あん心しんして食たべることができ。たとえ、世間せけんにいくら名ままえの聞きこえた陶器師とうきしでも、そのしんせつな心こころがけがなかつたら、なんの役やくにもたたない。」と、殿とのさまは申もうされました。

殿とのさまは、旅りよ行こうを終おえて、また、御殿ごてんにお帰かえりなさいました。お役やく人にんらがうやうやしくお迎むかえもうしました。殿とのさまは、百しやう姓うの生せい活かつがいかに簡かん単たんで、のんきで、お世辞せじこそいわないが、

しんせつであつたのが身みにしみておられまして、それをお忘れわすになることがありませんでした。

お食事しょくじのときになりました。すると、膳ぜんの上うえには、例れいの軽かるい、薄手うすでの茶わんちやが乗のっていました。それをごらんになると、たちまち殿さまとのの顔色かおいろは曇くもりました。また、今日きようから熱あつい思おもいをしなければならぬかと、思おもわれたからであります。

ある日ひ、殿さまとのは、有ゆう名めいな陶器師とうきしを御殿ごてんへお呼びよになりました。陶器店とうきてんの主人しゅじんは、いつかお茶わんちやを造つくつて奉たてまつつたことがあつたので、おほめくださるのではないかと、内ない心しん喜よろこびながら参さんじよう上じよういたしますと、殿さまとのは、言葉静ことばしずかに、

「おまえは、陶器とうきを焼やく名めい人じんであるが、いくら上じよう手ずに焼やいて

も、しんせつ心しんがないと、なんの役やくにもたたない。俺おれは、おまえの造つくった茶ちゃわんで、毎まい日にち苦くるしい思おもいをしてしている。」と諭さとされました。

陶器師とうきしは、恐おそれ入いつて御殿ごてんを下さがりました。それから、その有ゆ名うめいな陶器師とうきしは、厚手あつでの茶ちゃわんを造つくる普通ふつうの職しよく人にんになつたといふことです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「婦人公論」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「殿《との》さまの茶《ちや》わん」となっています。

※初出時の表題は「殿様の茶碗」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

殿さまの茶わん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>